

製品名: Dyrk1B ウサギポリクローナル抗体**カタログ番号: APRab10236**

研究使用のみ

概要

説明	ウサギポリクローナル抗体
宿主	うさぎ
応用	WB,IHC,ICC/IF,ELISA
反応性	ヒト、マウス
標識	非共役
修飾	未修正
アイソタイプ	IgG
クローン性	ポリクローナル
形態	液体
濃度	1mg/ml
保存	アリコートし、-20°Cで保存してください（12ヶ月有効）。凍結/融解サイクルを避けてください。
輸送	氷袋
バッファー	50% グリセロール、0.5% 保護タンパク質、0.02% 新タイプ防腐剤 N を含む PBS 液。
精製	アフィニティー精製

応用

希釈倍率	WB 1:500-1:2000,IHC 1:100-1:300,ICC/IF 1:50-1:200,ELISA 1:10000-1:20000
分子量	70kDa

抗原情報

遺伝子名	DYRK1B
別名	DYRK1B; MIRK; Dual specificity tyrosine-phosphorylation-regulated kinase 1B; Minibrain-related kinase; Mirk protein kinase
遺伝子 ID	9149.0
SwissProt ID	Q9Y463
免疫原	抗血清はヒト DYRK1B 由来の合成ペプチドに対して作製された。アミノ酸範囲: 331-380

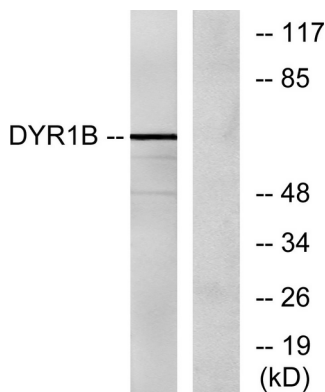
背景

この遺伝子は、核局在性タンパク質キナーゼファミリーのメンバーをコードしています。コードされているタンパク質は細胞周期の

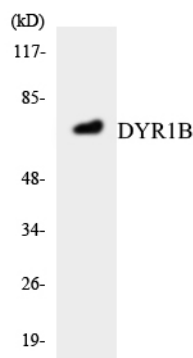
調節に関与しています。腫瘍細胞ではこの遺伝子の発現が変化する可能性があり、この遺伝子の変異は腹部肥満・メタボリックシンドローム3を引き起こすことが分かっています。選択的スプライシングにより、複数の転写バリエーションが生じます。[RefSeq提供、2014年6月],触媒活性: ATP + タンパク質 = ADP + リン酸化タンパク質。、酵素調節: RANBP9によって阻害されます。、機能: セリン/スレオニンキナーゼ活性とチロシンキナーゼ活性の両方を持つ二重特異性キナーゼ。TCF1/HNF1A および FOXO1 の転写活性を増強します。上皮細胞の移動を阻害します。ミトジェンが乏しい環境における大腸癌細胞の生存を媒介します。、PTM: チロシン残基が自己リン酸化されます。MAPキナーゼによってリン酸化される。二量体形成にはチロシンリン酸化が必要である可能性がある。、類似性: タンパク質キナーゼスーパーファミリーに属する。CMGC Ser/Thr タンパク質キナーゼファミリー。MNB/DYRKサブファミリー。、類似性: 1つのタンパク質キナーゼドメインを含む。、サブユニット: 二量体。DCOHM、MAP2K3/MKK3、RANBP9、TCF1/HNF1A と相互作用する。RANBP9、RAN、DYRK1B、COPS5 からなる複合体の一部である。、組織特異性: 骨格筋、精巣、心臓、脳で最も高い発現を示し、結腸や肺ではほとんど発現しない。様々な腫瘍細胞株で発現する。、

研究分野

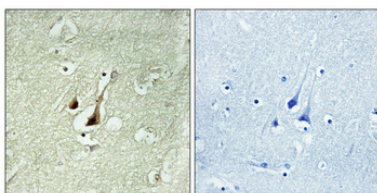
画像データ



DYR1B 抗体を用いた Jurkat 細胞ライセートのウェスタンブロット解析。右レーンは合成ペプチドでブロッキングされている。



DYR1B 抗体を使用した COLO205 細胞の溶解物のウェスタンブロット分析。



パラフィン包埋ヒト脳の免疫組織化学染色。抗体は 1:100 (4°C、一晩) に希釈した。抗原賦活化には、高圧高温トリス EDTA (pH8.0) を使用した。抗体から得られたネガティブコントロール (右) は、免疫原ペプチドで前処理した。

